

県内の総合型地域スポーツクラブ、第二段階へ

清原 泰治

(高知女子大学文化学部助教授)

「ここまで来ましたか...。」というのが素直な感想だった。

高知県教育委員会と高知県体育協会の主催で、1月13日と14日、高知県内の総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型とする)の関係者と、設立の準備をしている人々、そして設立を検討している人々が集まって研修会が開かれた。

講演会の講師として、そしてシンポジウムのパネラーとして参加させてもらったが、かつての「総合型批判論者」がいまでは「総合型は良いと思います」と勧めるようになったことが、奇妙に感じる。この講演のためのレジュメを作っていたときに偶然見つけたのだが、平成16年4月のいの町での講演で、「総合型は作っても作らなくても、どっちでも良いんじゃないですか」とまとめた。これから総合型を作ろうと真剣に考えている人たちを前に、まあ、なんと不謹慎な発言だったことか。あれから3年、私の意識も変わってきたが、県内の総合型もまた、大きく様変わりしてきている。



1月13日 中央地区研修会(県立高知青少年の家)

* * * * *

高知県で最初の総合型は、5年前に香我美町(現香南市)に誕生している。いわゆる行政主導で設立された「かがみスポーツクラブ」だが、現在は地域住民にしっかりと根付き、会員も増え、市民の健康づくりを主目的に活動を展開している。国や県、市からの補助に頼らない「自主運営」に向けて順調に体制づくりができており、「行政主導からの脱却」という総合型の課題をクリアしつつある。市の健康づくり事業の委託を受けるなど、官民のパートナーシップもできあがっており、今後の展開が十分に期待できる。県内では「お手本」にするべきクラブの一つだ。

県内にはいま、「かがみスポーツクラブ」を含めて11の総合型が設立されている。研修会には、「かがみスポーツクラブ」と土佐清水市の「スクラム」が欠席していたが、そのほかの総合型はすべて出席し、現状を報告してくれた。気になったのは、県内2番目に設立された中土佐町の「鯉乃國スポーツクラブ」で、一度は解散の危機を迎えた。中土佐町がもう一度バックアップしており、再建への道を進んでいる。

その他のクラブは順調に歩みを続けており、それぞれが特徴をアピールするようになってきている。「スクラム」は子どもの活動を中心に市民に広く浸透してきている。委託管理を受けている市民体育館の稼働率は非常に高く、高知国体で設置されたスポーツ施設の国体後の利用という点では、まさに「優等生」と言えるだろう。

土佐市の「クラブとさ」は、まだ設立されたばかりだが、「かがみスポーツクラブ」同様に健康志向のクラブで、魅力的なメニューが豊富に用意されている。市の中心部にある体育館だけでなく、周辺部でも支部活動が始まっており、全市的な活動に発展していく可能性が高い。

四万十町の「大正スポーツクラブ」ではソフトボールを軸に、小学生から社会人までが密接に連携をとって活動している。昨夏、中学生は全国大会準優勝、高校生はインターハイまであと一步の成績を上げた。競技成績が向上しているだけでなく、ソフトボールを通じて子どもから大人までの心の交流も広がっており、地域のスポーツクラブとしての特性

を十分に発揮している。総合型がきっかけになって医療費削減が実現できるかどうか、独自に調査を行うことも計画しているという。

高齢化率が50%を超える仁淀川町池川地区の「清流クラブ池川」は、高齢者を対象とする体操教室を開いている。「集楽」をキャッチフレーズにするこの教室を、やがて自主的なサークルに発展させ、町内の集会所を活動拠点に、高齢者の生きがいづくりに役立てようとしている。また、活動資金の獲得のために、高知女子大学と共同して、町外在住者を対象とする「ふるさと会員制度」を検討中である。

今回の報告の中で、特に興味深かったのは、須崎市の「すさきスポーツクラブ」である。この総合型でミニバスケットボールをしていた子どもたちが中学校に進学したところ、女子バスケットボール部がない。子どもたちの悲しむ顔を見た総合型の関係者たちが、体育館と指導者を確保し、練習を継続させることにした。そして、学校と交渉し、対外試合に出場するときには学校の教員が顧問として引率し、公式戦にも出場できることになった。日常の練習を総合型が引き受け、大会には中学校の代表として出られるような仕組みを作ったのである。地域のスポーツクラブが学校のスポーツ活動を肩代わりするというのは、総合型に期待されていた重要な機能だが、こういうクラブが実際に登場してきたことはたいへん魅力的だ。中学校にクラブがなく、やりたいスポーツをあきらめている中学生、高校生たちには朗報だと思う。

このほかにも、各クラブが設立準備期から苦労を重ね、その中で生み出してきた、さまざまなノウハウとアイデアを報告してくれた。

* * * * *

2日間の研修会を通じて、感じたこと、考えたことをまとめておきたい。

その一つは、総合型の設立のプロセスが変わりつつあることだ。県内でははじめ、行政主導で総合型が設立されている。「かがみスポーツクラブ」「鯉乃國スポーツクラブ」「スクラム」「すさきスポーツクラブ」はいずれも、当時の社会体育担当者が補助金をうまく利用しながらクラブを立ち上げ、運営の主導的な役割を果たしてきた。公共スポーツ施設を拠点に活動し、「鯉乃國スポーツクラブ」を除けば、いずれもNPO法人となり、施設の委託管理をしながら活動を展開している。



1月14日 西部地区研修会（四万十市中央公民館）

最近の特徴は、行政主導から住民主導に変わりつつあることではないだろうか。高知市の「旭東スポーツクラブ」は、ほぼ独力で総合型を立ち上げているし、まもなく設立されるであろう「いのスポーツクラブ」「高知チャレンジドクラブ」「ぬのしだピカッとクラブ」などもそうである。設立に向けて行政がまったく手助けをしないということはないが、住民主導の総合型が増えていることは間違いない。この傾向は歓迎すべきことであると思う。県外の事例を聞くと、行政主導型の総合型は、設立は順調にいくが、自主運営が始まってからつまずくところが多いという。もしそうならば、最初から住民主体である方が、設立まではたいへんでも、立ち上がったあとは順調に発展する可能性が高いのではないだろうか。

二つめに、これまで5年間で第一段階だとすれば、第二段階にあたる次の5年間は、総合型の連携を広げ、総合型同士の協力関係を構築し強化する時期にしていく必要があると感じた。先述のとおり、各クラブが生み出してきたさまざまな知恵が共有されることが重要だ。情報交換だけでなく、活動の交流も活発化することを期待したい。たとえば、どこかの総合型の会員が別の総合型主催のおもしろいイベントに大挙して参加する。ともに楽しめるだけでなく、人の交流は力を生む。そのためには、県教育委員会と県体育協会の役割は大きい。

三つめに、まちづくりをめざす活動が始まってきたことだ。「旭東スポーツクラブ」はまちづくり活動に寄与してきた伝統があるが、「大正スポーツクラブ」や「清流クラブ池川」でもそういう機能を発揮し始めている。市町村合併が進み、53 あった市町村が 35 になっている。合併した場合、新しいまちづくりという大きな課題がある。それまで別々に暮らしていた人たちが、合併したからといって急に一つになれるとは思わない。私はスポーツクラブこそ、その先駆けになるべきだと思う。スポーツ好きの人なら経験的にご理解いただけるだろうし、そうでない人でも「世界の共通語」と言われるスポーツである、近隣の愛好者が心を通わすことができないはずがない。「まちを一つに」という共通の目的のために、総合型を立ち上げ、地域スポーツの将来像を描いてみることを勧めたい。

* * * * *

「総合型地域スポーツクラブを語ることは、地域のスポーツの夢を語ることだ」と、私のゼミの学生が言った。県内で、地域スポーツの夢がどんどんふくらんでいる。